

登録有形文化財

# 畑田家住宅活用保存会年報

No.5 / 2006



Sadao N.

水仙 (庭の植物シリーズ 1)

## <今年の行事予定>

- |                            |        |            |       |
|----------------------------|--------|------------|-------|
| 春の一般公開と音楽会                 | 3月26日  | 関西二期会ソプラノ  | 畑田 弘美 |
| なつかしい日本の名曲とショパンの調べ         |        | なにわトリオピアノ  | 吉山 輝  |
| 第8回畑田塾                     | 5月28日  | 大阪大学名誉教授   | 池谷 元伺 |
| 動物の地震予報——前兆現象ってあるの？        |        | 大阪大学名誉教授   | 堀川 明  |
| 身近な出来事の中にある法則——自然は整っていて美しい |        |            |       |
| 秋の一般公開とフォーラム               | 11月19日 | 大阪大学教授・副学長 | 鷺田 清一 |
| 哲学はおもしろい？                  |        |            |       |

## 日本の心を体得しよう

会長 畑田 勇

ラジオやテレビから流れ出てくる箏曲「春の海」は、誰でも良く知っている非常に懐かしいメロディーであります。日本独特の楽器尺八と琴の合奏を、普通の家庭で聴くのと、日本古来からの様式の建物の中で、じっくりと聴くのとを比べたとき、後者の方がなんとなく名曲「春の海」らしく感じるし、その雰囲気や溶け合って、宮城道雄氏の名曲が一段と冴えて響くように思われます。音の広がる空間、環境によって、私どもの感覚が相当大きく影響を受けることを知ることができます。秋のフォーラムでの「春の海」の演奏を聞いてつくづくそう思いました。

フランスの有名なバイオリニスト シュメーさんは、この「春の海」のメロディーに強く打たれバイオリンと合奏してそれなりに成果があったようですが、われわれ日本人にとっては、やはり琴と尺八の合奏の方が叙情豊かで情景描写において遙かに優れているように感じられるのであります。

平家物語冒頭の名調子「祇園精舎の鐘の声。諸行無常の響きあり・・・」とは夕暮れ時あちこちの寺でおもむろに梵鐘をならすとき、その味わいが一段と叙情的で荘厳に響き渡るのであります。

日本の楽器は日本古来の環境において育ち、その中でより真価を発揮できて、人々により深い感動を与えるものであると思われまます。

この共感の仕方が日本人独特の感覚であり、その雰囲気が日本の心であると思えます。

## 平成 17 年度 事業報告

### 1. 第 6 回畑田塾 2005 年 3 月 26,27 日

「雨はどこからやってくる」

気象予報士 高島 誠

「ふしぎ」をみつけよう！水を吸うプラスチック  
大阪大学総合学術博物館

教授 江口 太郎

「あなたもコンピュータになろう」

大阪工業大学 教授 中西 通雄

「友だちといっしょに自分を表現しよう」

LIC はびきの演劇ラボ芸術監督

八木 延佳

### 2. 一般公開とフォーラム

#### 1) 第 11 回春の一般公開とフォーラム

5 月 29 日

[家族生活の国際化と法]—国際結婚や国際養子縁組の法律問題はどのように解決されるか

帝塚山大学法政策学部教授

大阪大学名誉教授 松岡 博

#### 2) 第 12 回秋の一般公開とフォーラム

11 月 13 日

「尺八談義」都山流尺八竹琳軒

お話と尺八 松山簫雨山 (辰男)

箏 藤田 春菊

#### 3. 第 7 回畑田塾 10 月 30 日

「セレンディピティーを知っていますか」

筑波大学名誉教授

ノーベル化学賞受賞 白川 英樹

#### 4. 出版「キレイな、健康なところと脳を育てるのに、何が大切？—食事や栄養に関する知識は必須アイテム」

大阪大学保健センター長 杉田 義郎

## 新正会員 (平成 17 年 3 月以降)

浅野育洋	井上亜紀	浦野民子	太田真紀
小寺悦子	齋藤園子	渋谷 亘	白木和子
添田美和	武枝敏之	田中良和	永井一郎
長島美由紀	沼口省三	畑田弘美	浜田万里
福井康子	藤本昌巳	藤本優子	堀田 登
松本紀文	松山辰男	六田充輝	山下啓一

## 新特別会員

江口太郎	白川英樹	中西通雄	松岡 博
松山辰男			

## 役員

会 長	畑田勇
副会長	甲斐学、中村貞夫 畑田拓男
幹 事	石井智子、笠井敏光 畑田弘美 矢野富美子(新役員)
会 計	畑田庸雄
顧 問	畑田耕一

## 第7回畑田塾 白川先生の「セレンディピティーを知っていますか」を聞いて

兵庫県立淡路高等学校教諭 渋谷 亘

さわやかな秋空の下、畑田家住宅で行われた第7回畑田塾に参加した。今回の講師はノーベル化学賞受賞者の白川英樹先生、120年近い歴史を刻んできた建物で最先端科学のお話を聞かせていただくというなんとも贅沢なひと時であった。このような環境で、小・中学生から一般の大人の人達までが、一流の専門家と同じ時を過ごせるのが畑田塾の醍醐味であり価値なのであろう。

普段は演台を使ってのご講演や発表が多い白川先生、畳の部屋での講演は多少勝手が違うとお感じになったかもしれないが、先生の息遣いが聞こえてきそうな近さでメッセージを聞かせていただき、廊下や次の間にあふれかえった子供たちの熱気は最高潮であった。

ノーベル賞に輝かれた白川先生の科学的素養は、鉱石ラジオづくりや昆虫採集などご自身の子供のころの体験によって形成されていることがお話からうかがえた。原体験の重要性が示された形である。学校の先生から「モウセンゴケ」の図鑑を見せられて、ご自身の昆虫採集の経験と知識を総動員してモウセンゴケを探されたお話や、採集した蝶の鱗粉転写をご自身でなさったこと、また、顕微鏡写真を自身で撮影し現像されたことなど、昆虫採集という趣味から派生したさまざまな体験をうかがった。その一つ一つが白川先生を形成していく上で重要な素養となっていることがお話からわかった。これこそが自然科学の学びなのであろう。学校で行われている教科書を使った理科の授業が不要とはもちろん言わないが、自然科学の学びに原体験がいかに重要かを示唆するエピソードではなかろうか。また、趣味の継続と深化が学習意欲につながり、ひいては学力の向上につながることは間違いなさそうである。

昆虫採集が高じて鱗粉転写や顕微鏡、写真などを自分で学ばれたという一連の流れは、まさに現在の「総合的な学習の時間」が理想とし、目指すところであろう。今の子供たちを取りまく住環境や社会的環境は以前とは様変わりした。科学技術の著しい進歩はそのブラックボックス化につながり、素人が製品を分解しても仕組みは複雑でわかりにくい。昔のように原体験を得にくくなっているのは確かである。総合的な学習の時間の有効な活用でそれを補うことができるのではないかと、白川先生のお話を聞きながら感じた。

白川先生の科学に対するお話はまた、高校教師である私にも重要なアドバイスとなった。科学を子供たちに伝えるためには、教師自身が科学を好きでなければならないという当たり前のアドバイスである。少子化や公務員削減などに伴う教職員定数の減少の一方で、多様な教育を図る政策が進められた結果、教職員が自分の専門とする教科以外の授業を担当しなければならないケースが増えた（いわゆる臨時免許状による授業や学校設定科目などに伴う免許外科目）。そのような教科科目の授業では、自分では努力しているつもりでも、どうしても自分の専門教科のようにうまくいかない場合がある。授業を受ける生徒にとっては、先生の存在がその教科の好き嫌いに結びつくことが、往々にしてある。そのことを十分に自覚して、楽しい授業を心がけているつもりではあるが、専門外の教科の場合、それがなかなか難しい。白川先生の、「先生が好きでないと子供には伝わらない」の言葉を聞いて、特に心して授業にかからないといけないと改めて感じた。どの教科にもそれぞれ面白い点はある。教師は敏感にそれを悟り、生徒に伝えなければならない。そのために、教師は相当の研究と修養を積まなければならない。一方で、行政は教育の現状の変化に合わせて教職員の数を調整すべきであろう。単純に、子供の数が減ったから教職員も減らすという考え方では、子供に学ぶ意欲を持たせることは難しい。

「セレンディピティーは努力した人にだけ訪れるのだよ」と温和な笑顔で語られる白川先生、その言葉からはノーベル賞に裏打ちされたたゆまざる努力と工夫があることが伝わってくる。小柴先生のニュートリノ観測も、たまたま装置を設置した直後に観測されたと報じられたが、万全の準備をしていたからこそ、奇跡的なチャンスをもたされたのである。白川先生の導電性高分子の発見も、たゆまざる実験の繰り返しをしなければ、たまたま触媒を通常の1000倍も入れるということはなかつただろうし、また、常に意識をしていなければその際見られた異状な現象も単なるミスとして処理されていたであろう。セレンディピティーという言葉がマスコミにもてはやされ、偶然の発見がノーベル賞につながったかのように報じられたが、そこに隠された努力が研究成果の源であることは間違いない。

講演を拝聴して、白川先生のような大きな仕事はできなくとも、常にセレンディピティーを意識して、生涯にわたってたゆまぬ努力を続けたいと思った。そして、教師として担当した教科の面白さを子供たちに伝えていきたいと、改めて強く認識した次第である。歴史を重ねた登録文化財の家での科学の最先端のお話を聞き終えて外に出ると、透き通る秋空にたわわに実る柿の色が心にまぶしかった。

## 畑田塾で学んだこと

筑波大学第二学群生物資源学類 久米由香里

畑田塾には、中学三年生のときに初めて参加しました。それから、先生方のお話を聞けるのが楽しみで、毎年出席させて頂きました。

高校までの授業は教養としての性格が強く、学問の基礎の部分なので、今学んでいることが社会でどのように使われ役立っているかを理解するのは、生徒にとっては難しいものです。ですから、そういう中で、学問にはいろんな分野があり、それらの分野は実生活の様々なところにつながっていることを知るの、大変すばらしいことです。畑田塾では、畑田耕一先生の「聞いて見て触るおもしろ化学」、辻正次先生の「お金はなぜあるのか」、杉田義郎先生の「キレイな心と脳を育てるのに、何が大切？食事や栄養に関する知識は必須」など、先生方はさまざまな分野のお話をして下さいました。私は大学で森林について学んでいるので、金森順次郎先生の「磁石の不思議」など自然科学の分野の話が興味深かったです。「へえー、今はこんなことがわかるんだ！」と驚きが多く、聞いていてわくわくしました。

また、普段は誰でも、関心のあることについて視野が偏ってしまいがちです。しかし、そのような壁を越えて、小林正典先生の「対地雷とカンボジア」、糸魚川直祐先生の「サルの社会に学ぶ」など、私の場合、普段はあまり触れる機会のないところでこんな大事な仕事をしている人がいるのだなあ、と、社会の奥ぶかさを実感しました。

科学の研究という視点からみると、学校では比較的答えのはっきりしていることを学びます。けれど、山本智先生の「富士山頂から星の誕生を探る」のお話を聞いて、これだけ科学が進歩しても、世の中には未だに把握しきれていないことが沢山あることを知りました。大人が作っている社会は、子供の目には完璧に映りがちですが、本当は、分からないことや手に負えないことも沢山あるんですね。

学生が進路やその先の仕事を考えるときに、実際に働いている人の話を聞くことは、とても大切です。学生の立場では足りない経験や視野を得ることができました。また、この塾は小・中・高校生を対象としていますが、今までの経験をふまえて人それぞれの捉え方ができるでしょうから、どのような年代の人達にとってもためになるのではないのでしょうか。

第7回の畑田塾は残念ながら参加できなかったのですが、白川先生が実体験の大切さについて語られ、先生の息遣いが聞こえてきそうな近さで先生のメッセージを聞いた子供たちの熱気は最高潮であった、というお話を伺いました。宮沢賢治の「春と修羅」の“あすこの田はねえ”という詩に、本当の勉強は机に座って先生から義理で教わるものでなく、実際の体験の中で大変なことを乗り越えながら学ぶものであるという言葉があります。畑田塾の先生方は、現在第一線で活躍しておられる方々で、自分が実際に経験して学んできたことを話して下さいます。先生方の心のこもった言葉は、いつまでも人の心に残るものです。それらは長い目でみると、その人の人生に何かしら影響を与えるのではないかと思います。自分一人が経験できることは限られますが、人から話を聞くことで、疑似体験になったり、考え方を学んだり、得るものが沢山あります。

このように、畑田塾では本当にすばらしい経験をさせて頂きました。このような貴重な機会を下さった方々に感謝します。

## 本年の行事に参加していただいた方々からの感想文

### 第6回畑田塾(2005年3月26・27日)

雨がどうやって降ってくるのか、台風を中心はなぜ風が吹かないのかがよくわかりました。水に溶けるポリマーの実験はすごかったです。固まったり、また液体に戻ったりして楽しかった。

小川和貴(中学生)

気象の勉強にとっても興味をもって来ました。とてもわかりやすく、より興味をもちました。科学の実験がとても面白かったです。より知識をつけました。また来たいです。

小川博貴(高1)

古い文化財に直接接して、維持して行くことの大変さと年代を経てなお木の持つ豊かさを感じました。庭の「しおり戸」や家の壁に使われていた杉の皮の材を見まして懐かしい思いがしましたし、家の中の古い物も懐かしく思いました。勉強の方、面白いお話をして頂き、孫達の成長と共に私ももっと頭を軟らかくして種々な事に関心を持ちたいと思います。

小川アサ子(放送大学生)

2年前と比べると大分わかるようになったが、化学のむずかしい話の時の脳内は2年前と全くかわらない。面白かったことにかわりはなかった。

稲富桃子

何かの現象を、ふしぎと感じたりすることが、大人になるにつれ私自身少なくなっているように思いますが、そういうことの大切さを思い出させて頂きました。有難うございました。

稲富明子

プラスチックの実験で粉末を入れただけで、すごい吸水力で固まったことにびっくりした。天気図の見方がわかった。大学のような勉強でわからない言葉がいろいろ出てきたけど楽しかった。

河元望実

プラスチックの実験は、固まったり、また、液体にもどったりしてとても不思議に思ったし、とても楽しかった。天気はちょっと難しかったけど、勉強になったと思う。

畑田真莉子(小6)

「友達といっしょに自分を表現しよう」で、たくさんの人と交流ができたのでよかったです。勉強みたいじゃなくっておもしろかったです。水を吸うプラスチックは初めての実験だったのでワクワクドキドキしました。春、夏、冬休みなら大阪にもどってこれるので、また畑田塾に行きたいです。秋は秋休みがないので来れないけどとても楽しかったです。昔の道具も多くて写真を撮りまくりました。またいつか探検させてください。

山本涼香(小4)

畑田塾は初めてだったけれど、勉強になったので来て良かった。いろいろな体験もでき、なにより昔の家の構造が分かったので面白かった。昔、こんなに広くて美しい家に住んでいた畑田先生はやっぱすごいと思った。歴史が好きな自分にとって、ここは、すごく勉強になるかけがえのない建物だ！また機会があれば来たいなと思いました。

山本耀平(小6)

「畑田塾」うわさには聞いておりましたが、初めて参加させて頂き、講師と生徒の間の距離が近いのに驚きました。内容も理系に偏らず、参加者があきないように工夫されており、畑田先生はじめ関係者の方々のご尽力と人脈が感じられます。コミュニティーの重要性、生涯教育の重要性は今後世の流れとして益々強まってゆくと思います。その中で、このような地道で質の高い活動が重要性を増してゆくと思われま。講師も生徒も未だ手さぐりという現在の状況から、こういったことが当たり前になる日がきっと来ると思います。

講師は自分の専門をいかに平易にしかも正確に市民に伝えられるか、そういった技量も試されている様子にも思いました。何十年か後、私も市民に科学を伝える立場になりたいと漠然と考えるきっかけになりました。有難うございました。 山本正則（北九州市）

2日間普段とは全く違う空間で興味深いお話を聞かせていただき有難うございました。私は、実は学生の頃、理科が大変苦手でした。正直、全く興味が持てなくて授業もつらいものでしたが、もし今回のような授業から入っていれば全く違う印象になっていたと思います。何よりも、子供達が、私が予想していたより、はるかに興味を示し、楽しかった様子にとっても嬉しく感じました。遠方なのでなかなか参加できないのが残念ですが、ぜひまた子供達が休みで帰省できる時にうまく参加させて頂ければと思っています。畑田家のおうち自体が子供達にとってとても楽しい空間ですし、もっと多くの子供達が来て、いろんな興味や発見のきっかけになればと願っております。 山本雅代（北九州市）

天気の話聞き、ゼリー状に固まる水に驚き、コンピューターの一部になりきり、演技に力を入れたこの2日間。美しい畑田家の中で学んだ2日間。たった2日間だけでしたが、学校の教科書には無い、今の教育には無いすばらしい授業を受けて、今までになかった充実感を得られたと思います。機会があれば次回も参加したいです。 米田なつお

1+1=2でありまた1+1=1にもなるのだと知りました。頭脳と体とそして心が大きい刺激を受けて温度が上昇しています。 米田弘子

気象の話では、何故雨が降るのかを分かり易く説明していただきました。「なぎ」という言葉を知ってはいても意味を取り違えていたことがよく分かりました。プラスチックの話は実験をしながら聞けたので、楽しく授業を受けることができました。コンピューターの話では、日頃よく聞いている用語の意味が分かりました。演劇では自己表現のきっかけになる方法を教えて頂きました。今回は、娘は参加出来ませんでしたが、二日間内容の濃い授業で、楽しく過ごさせて頂きました。私の小さい頃にこういう塾があれば良かったのと思います。畑田先生の「人は世界の人々を幸せにするために働いている。そのためにどうしたらよいか考えることだ」という言葉を聞き、それに近づきたいと思う今日この頃です。子供達にもこの言葉を伝えたいと思います。 大脇玲子（放送大学学生）

畑田塾への参加は今回が初めてですが、小・中・高校生を対象にした自然科学の講義はとても興味深いものでした。私達大人は当たり前のこととして、日頃深く考えることのない現象を科学の目で理解し、考えることの重要性をあらためて認識させられました。気象の話は、中学生ぐらいなら、もう少しレベルが高くていいかと思いました。各々の子供の関心や知識・理解度が異なるので難しいかもしれませんが、水を吸うプラスチックは便利なものであるが紙オムツなどに多く使用されていることで、環境への負荷が大きいことも話して欲しかったです。コンピューターの仕組みについて、かなり分かりました。子供にとって知的好奇心を刺激することが良かったと思いました。また次回を期待しています。

白木和子（放送大学学生）

とても楽しかったです。また来たいです。プラスチックが楽しか

ったです。

稲田拓史

とても勉強になり楽しかったです。雨のふる理由が良く分かったし、プラスチックの実験も楽しかったです。最後の演劇の授業は思わず子供のように大きな声で笑ったりして、大変楽しいものでした。

稲田容子

#### 春の一般公開と国際フォーラム（2005年5月29日）

畑田家住宅、こんな立派な家で暮らしたことは無かったけれど、それでも、子供の頃を懐かしく思い出すのは何故でしょうか？そんな家のお座敷で、国際法のお話を楽しく聞かせていただきました。いまどき、本もたくさん出版されていますし、テレビでも、ラジオでも、その気になれば、あらゆる分野の知識を身につけることが出来るのですが、立派な講師のお話を身近に聞ける機会は滅多にありません。外国との交流が盛んになって、世界は小さくなっていますが、それでも、国によって考え方、感じ方が違うし、法律もさまざまです。今回のお話の中心であった結婚についても、日本のような届出婚主義のほか、宗教婚主義、儀式婚主義をとる国もあり、また、訴訟を起こすときには、国籍を重視する国、居住地を重視する国があり、素人のわれわれには、国によって違いがあることだけはしっかり知っておかなければと思いました。フォーラムのますますの発展を願い、また、是非参加したいと思っています。

島浦洋子（家裁調停委員）

畑田家の長屋門をくぐり、主屋に案内された時、ふっと明治から続く人々の暮らしの匂いと、ぬくもりを感じた。家に人あり。この旧家は、私たちが絵を学んでいる中村貞夫先生一家が長年住み、いまも納屋は先生のアトリエになっている。さらに、国の登録有形文化財に登録されて、畑田塾やフォーラムを開催するなど、知的な活用と、開かれた空間を提供している。私も、田の字型平面を持つ農家に育ったが、あの阪神・淡路大震災で全壊、父がその下敷きになり他界した。畑田家当主の畑田耕一氏の味わい深い説明を聞きながら、一瞬にせよ消えたわが家に帰り、父と会い、雑事に汗を流した少年時代の私にも「再会」できたように思えた。感謝。

宮本範熙（宝塚造形芸術大学梅田キャンパス）

私が小さかった頃はまだ当たり前に見られた生活の端々を畑田家の中から見つけ出しては、忘れていた実体験が鮮烈に甦り、身近な過去を想い出して感動しました。また、松岡先生は国境を越えた絆・婚姻問題でさえも、一度不調に陥ると複雑な側面を見せる事例を、法的な面から丁寧に説明して下さいました。現在の日本での国際結婚は5%に及ぶとの事でしたが、近頃は多くの方々が海外活動に従事されるようになり、実践行動は末端へ行くほど問題点の所在が他人と組織との間で区分し難くなると思われます。自分の僅かな海外経験でも、日本の人々は国際的な法知識の上では丸腰に近い状態で臨んでいる事が多く、自身の健康や安全、契約不履行の被害等々に一人で危険に曝される機会が少なくありません。また別の機会に、専門的な立場から「国際的な任務に赴く前に、これだけは確かめて」といった話題について聴かせて戴ければ嬉しいと思いました。

田村幸男（画学生）

教授、そして弁護士でもある松岡先生が、国際私法の講演をなさると畑田先生から伺い、法律問題について素人の私は殆ど何も分からないのではないかと思います。しかし、「家族生活の国際化と法」と

いう題には留学生として興味があり参加しました。松岡先生が最初にお話されたのは「30年前日本の国際結婚は0.5%だったのに、いまは5%である。つまり100組の中で5組は国際結婚である。」でした。これを聞いて私は、日本は本当に国際化が進んでいるなど驚きました。それから、先生は6つの国際私法の例を説明し、その答えを参加者に当てさせるというクイズ形式で講演を始めました。最初の例は、ドイツ人のHとWは、同国で結婚した後、日本に来て生活している。夫の「子供は持つべきではない」という信念と妻の「子供は持つべきだ」という考えの違いが妻の結婚取り消しの事由になるか?という問題でした。日本の法律では戸籍に入ると結婚は成立します。ドイツでは結婚の相手の人柄に重大な錯誤があれば、結婚は取り消せるということです。講演がここまでできますと、質問があちこちから飛び出しました。「もし、日本人がハワイで挙式したらどうなるか?」、「式だけ挙げて、籍を入れなかったら、外国で別人と結婚できるか?」等々。この時松岡先生が三つの判断基準を示されました。①どの国の裁判所が事件を裁判する権利があるか、②どの国の法律が適用されるか、③外国の判決はどのような場合にその効力が承認されるか、の三つです。さらに、先生はさまざまな判例を紹介しながら、同じような質問にも丁寧に説明して下さいました。3時間の講演があつという間に笑いと議論の中で終わりました。松岡先生、畑田塾の皆さん、楽しい時間を有難うございました。

李哲雨 (大阪大学大学院医学研究科)

#### 第7回畑田塾 (2005年10月30日)

会場に着くと僕は、白川先生のお話分かるだろうか不安でした。でも、先生のお話は分かりやすく、ほっとしました。白川先生のお話を聞いて一番に残ったのは、「チャンスは待ち構えた知性の持ち主だけに好意を示す。」という言葉です。これからは、チャンスが回ってくるのを待つのではなく、チャンスがくるように努力しようと思います。 谷本広太 (大阪教育大付属平野小5年)

今までは、あんまり科学や理科が好きではなかったけれど、お話を聞くと、ラジオを作ったり、昆虫や植物を集めたり、観察したりしたくなってきました。わたしの家にも、夏から飼い始めたクワガタがまだ元気になっています。しっかり育てて、長生きさせたいです。春には、種をまいて花を咲かせるのも楽しみです。これからいろいろなものに興味をもっていきたいです。白川先生、楽しいお話を有難うございました。 藤本 凜 (小4)

この講演を聞いて幅広い知識の必要さを痛感しました。誰でも知っている白川先生の功績が、たとえ偶然生まれたものであっても、30年余りの努力がその結果につながったと思います。先生が仰っていた知的好奇心という言葉が今後の僕のモットーとなるような気がします。これから、どのような道に進もうとも、何にでも真剣に取り組み、偶然訪れるチャンスも見逃さないような人でありたいと思います。 福永将吾 (高2)

高校生の僕は常に答えが用意されている勉強をしています。そうでない課題に向かって30年近く研究し、ノーベル賞という偉大な功績を上げられた白川先生のお話を伺うことができ、本当に嬉しかったです。僕は理数科目、特に数学が好きでコンピューターに興味があるので、大学では、工学部情報学科に進学しようと考えています。僕も研究者になると思いますが、巡って来るチャンスを自

分のものにできる白川先生のような研究者になりたいです。

清水佑一朗 (高2)

自分は今数学者になりたいと秘かに思い、頑張って数学の勉強をしています。しかし、学校の数学はなかなか思うようにいかず、あまり好きではなくなって来ていました。今回、白川先生のお話で「セレンディピティー」すなわち、思わぬものを偶然に発見する能力というものを教えていただき、数学も化学と同じで、常に知的好奇心を持ち、色々な視点から見れば面白くなるのではないかなと思うようになりました。今後は楽しんで数学の勉強をしていけそうです。

井上秀太郎 (中1)

白川先生の講演があることを知ったときに、はじめに興味を持ったのは「セレンディピティー」よりも白川先生の研究の内容でした。ノーベル賞の研究はどのようにして生まれたのか、またその内容はどのようなものかを詳しく知りたいと思ったからです。先生のお話を聞いて、ポリエチレンは絶縁体なのにどうしてポリアセチレンは電気を通すのかは、だいたいは理解できました。導電性プラスチックの発見のきっかけが、誤って通常の一十倍の濃度の触媒を使って反応させてしまったためだということも分かりました。そして、それをこの発見に結び付けた力がセレンディピティーだったのです。「偶然」を素晴らしい発見に結び付けるためには絶え間ない勉強と努力が必要なのだということを実感しました。将来のことはまだ考えていませんが、化学に対する興味も一層強くなりました。身の回りのことに常に疑問を抱き、それを解決しようとする努力を怠らなようにしたいです。 西川秀明 (中1)

中学に入って始まった化学の授業に興味を持ったので、この会に参加しました。お話の中で、「偶然の中での発見」という言葉に印象が残りました。題目のセレンディピティーとは、偶然の中で発見する能力のことを言うのです。先生は偶然の発見によってノーベル賞を受賞されたのです。その偶然も普段から努力している博士だからこそ発明につながれたのであり、大抵の人は、たとえ出会えたとしても気付かないで通り過ぎてしまうのです。僕も努力して白川先生のような立派な人になりたいと思います。

石塚人士 (中1)

白川先生のお話はわかりやすく興味深いものでした。セレンディピティー、偉大な発見の種はいつも身のまわりにある。それが根を下ろすのは、それを待ち構えている心にだけである。偉大な発見をするには常に勉強を続けなくてはならない。会社での仕事でも同じことが言えると思います。常に勉強です。私なりに勉強を続けていきたいと思っています。今日聞いたお話は友人にも話をして広めていきたいと思っています。 田中美幸 (クリロン化成)

私は、ノーベル賞受賞者の先生に初めてお会いした。どんな先生だろうと少し緊張したが、とても優しい先生でほっとした。私は化学に少し興味を持っていたが、話の内容は小学校6年生の私には少し難しかった。でも、「セレンディピティ」という言葉の説明から、最後は科学的な話になって、その構成はとても素晴らしかったし、面白かった。これから中学生、高校生、大学生と大きくなっていく中で難しい科学を習っていくと思う。その時に、今回白川先生にお会いし、学んだことをいろいろな勉強に役立てたいと思う。そしてノーベル賞を受賞した先生にお会いしたことをみんなに話したい

と思う。お話の中に出てきた「セレンディブの3人の王子たち」という本も読んでみたいと思った。 畑田真莉子(小6)

僕は工業高校1年生ですから、ポリアセチレンはアセチレンという気体が固体になったものかなと思いました。アセチレンは溶接で使われているからです。今回の話は、化学が中心で、僕が知らないこともありました。偶然で人生が左右されるなんて、すごいなあとおもいました。もう一度こういう機会がありましたら、ぜひ参加したいなあと思います。 小川博貴(高1)

ぼくは「セレンディビティー」の意味が、少し分かったような気がしました。偶然が生み出す大発見!!ぼくも人生に一回ぐらいは、そんな事がありそうなので、その時に、今日聞いた事を生かそうと思います。残念な事に、HやCなどの原子記号をまじえた話は理解できませんでした。でも、白川先生から言われた事は、決して無駄にはならないので、ぼく達はこれからなので、少しずつ理解していきます。 山本耀平(小6)

ノーベル賞の金メダルの裏の絵の意味がわかって、とても嬉しかったです。ふだんノーベル賞のメダルなんて見られないし、意味も分からないだろうけど、今回教えてもらって良かったです。白川先生は、小さいころから理科が大好きで、研究をたくさんしていたから、すごい人になれたんだなあと思いました。セレンディビティーの話も、とても楽しかったです。 山本涼香(小4)

ノーベル化学賞受賞者 白川先生の講演を聞く機会に恵まれ、とてもわくわくした気持ちで、畑田塾の開かれる畑田邸の部屋に入ると、元大阪大学副学長園田先生のクラシックのピアノの演奏で迎えられ、快い気分になることができました。白川先生の講演を拝聴し、先生自身の研究心の深さに驚きました。小さい頃は、自然や科学に対する興味は誰でも持っているのですが、先生は興味を持ったものに対する姿勢や探究心の強さ、深さが違いました。非常に熱心で、強くて深いのだと感じました。ノーベル賞を受賞されるまでの研究生生活を拝聴し、神様はすべてをご覧になっているということだと改めて納得しました。先生にセレンディビティーを授けたのも、神の姿の表れでした。ポリアセチレンという高分子の薄膜結晶の電子構造や、結晶の色や銀鏡のような反射面を持っていることなどを聞き、想像力をかき立てられました。理科教育についての先生と参加者との話にも興味を引かれましたが、時間の余裕がなかったのが残念でした。白川先生のお話を生で、しかも膝を交えて目の前で伺うことができ感激しました。 白木和子(放送大学生)

白川先生のお話は穏やかな中にも科学者の誇りが感じられる眩しいもので、畑田先生の機転の利いた司会とは絶妙な取り合わせでした。お屋敷の雰囲気といい、お話の前のピアノの演奏といい、独特の暖かな空気が流れていました。一緒に行った高校生達も質問をしたり、個人的にお話をさせて頂いたりして、大変喜んでいました。立派な科学者は子供の頃に、昆虫や植物の採集をしていたという話をここでも聞いて、やはり、自然に浸り、自然から学ぶことの大切さを強く感じました。 真砂和典(千里国際学園教諭)

#### 秋の一般公開と音楽フォーラム

尺八と琴の音色は、お正月のテレビで耳にしたことはありましたが、なんとなくお目出度いという感じでした。近くで始めて聞かせて頂くと、尺八の音には鋭い響きがあって緊張を覚えました。当日、緊

張解消の音楽療法が話題になりましたが、時には、緊張をもたらす尺八の音色が精神活動に有用であるかなと、古い木造の高い天井を眺めながら感じました。 畑田元義(寝屋川市)

演奏中ふと、家の外で、鳥の轉りが聞え、尺八と琴が奏でる家屋の空間と調和し、なんとも言えない心地よさを感じました。尺八の音色は西洋の楽器に比べ、日本の水墨画や朝もやのかかった森林の風景が浮かびました。都会から離れ、森林浴などといって、郊外に癒しを求める時代に、尺八などの日本独特の楽器は癒しを作り出せる治療樂器的な要素を持つのではないかと考えながら、日本の静けさを楽しませていただきました。 原道寛(大学講師)

心地よい尺八の演奏をお琴の素晴らしい音色と共に畑田家住宅の素晴らしい環境の中で聞かせて頂いた。古典的なものから現代的なものまで尺八という日本伝統樂器の可能性も披露していただき本当に楽しい時間を過ごすことができた。美しい音色を堪能させて頂いただけではなく、元病院長という激務につきながら、素晴らしい尺八奏者としても活躍するその心のゆりの持ち方を学ばせて頂いた。通常仕事が忙しくなると、趣味に時間を費やすことは難しくなる。また、趣味人間に徹することで、適当にこなせる仕事を選択する場合もある。しかし、仕事と趣味の両方の粹に達するという事はこの上ない理想的な人生であると思う。なかなか口でいうほどたやすいものではないが、趣味と仕事、少しづつでも両立させることで人生を豊かなものにできればと改めて思わせていただいた貴重な体験であった。 古馬京子(在リトアニア)

It was a great pleasure to see Hatada-family beautiful mansion and listen to the relaxing music. The historic and wonderfully preserved mansion was built during the Meiji era by Yasugoro Hatada, the head of the village at the time. It was at this mansion that I had the privilege to attend a lecture and concert of Shakuhachi (traditional Japanese flute) and the 13-stringed Koto (traditional Japanese zither) presented by Dr. Matsuyama and Ms. Fujita. The event took place in the central rooms of the mansion which provided an atmosphere very appropriate for the traditional music. The musicians performed five pieces of the most pleasant music. Although I must admit I am no connoisseur of Japanese traditional music or instruments, I was awed by the range of intonations that the musicians were able to create with their instruments giving beautiful variations of tone and intensity to the pieces played. Having played both classical and electric guitar for many years, I was amazed to see the Koto string plucking techniques used by Mrs. Fujita and discovered parallels between these two instruments such as the creation of harmonics by plucking the string while gently touching it with a finger of the other hand to create a "node" in the string's vibration. Between the pieces, Dr. Matsuyama talked about the Shakuhachi and his many years as a gifted amateur performer and after the concert patiently answered the audience's questions. Again, many thanks for being such a kind host and I wish you and your foundation much success.

Martin Zulliger(Switzerland)



## 畑田塾で「ふしぎ」をみつけよう！

大阪大学総合学術博物館長 江口太郎

最近、「スロー・フード」とか「スロー・ライフ」といった言葉を時おり新聞紙上で見かけるようになった。日々の生活は忙しく、ナノテク、バイオ、ITなどの最先端科学技術に追いつまわられている感じがしないでもない。これらはいわゆる文化の「軽薄短小」化であるといってもよいだろう。それに反して、冒頭の「スロー」は、近年軽視されて来た「重厚長大」に属するものと考えられる。

畑田塾は、江戸時代の庄屋屋敷の重厚な格式を伝える畑田家の広間で行われる「寺子屋」風の授業だ。「学」の字源は、堂々たる殿堂の下で子どもが集って勉強する様子を表しているといわれているが、畑田塾はまさにそれにぴったりの雰囲気をもっている。そこにふさわしいのは「スロー・サイエンス」であろう。

ここでの「スロー」は、じっくり考えることを意味している。本年3月の畑田塾で、『ふしぎ』をみつけよう！ 水を吸うプラスチック？』と題して簡単な実験と授業を行った。まず、その内容を簡単に紹介する。

プラスチックの定規を水につけても何も起こらない。ティッシュペーパーの場合はじわじわ水を吸い上げてゆく。こんな当たり前のことを子どもたちに見せて、問いかける。なぜこんな違いが出てくるのか。「紙には隙間（穴）があるからで一す」と元気に答える子どもがいた。つぎに、穴のいっぱい開いたスポンジを取り出し、その重さの何倍の水を吸い込むかを尋ねた。これはちょっと難しいので、天秤で重さを量ると、10倍程度の水を吸い込んでいることがわかる。子どもたちに水を吸うためには穴が必要であることを発見させる訳である。

引き続き、白い高吸水性ポリマーの粉末1gをコップに入れ、その中に100gほどの水を注ぎ込む。ゆっくりかき混ぜるとまるでゼリーのように水が固まるのがわかる。驚く瞬間である。子どもたちには高吸水性ポリマーにも目に見えない小さな穴が開いていることはなんとなく想像してもらえらる。しかし、それだけでは100倍もの水を吸うことは説明できない。それは、一言でいえば、特殊な巨大分子で作られた網目構造によるものである。ところで、固まったゼリーの上に食塩を1g振りかけてゆっくりかき混ぜると再び水が染み出てくる。「浸透圧」の説明は子どもたちには難しいが、付き添いのお母さんから「漬物を作るときに塩を振り掛けるのと同じですね」との声がかかった。まさにその通りである。このような連想の能力も、ものを考えるうえできわめて重要である。

最近では、テレビで「大自然のふしぎ」、「宇宙のなぞ」、「人体の驚異」といった科学番組をよく目にするが、ふしぎなものや現象が次々に画面にあふれるばかりで、子どもたち自身が考えるいとまはない。また、子どもたちの基礎学力不足や理科離れを懸念する論調が新聞紙上をにぎわすことが多いが、私はそれが決定的であるとは思っていない。もっと心配なことは、ハイテク満載の携帯電話などを目の前にして、不思議ともなんとも思わずに、「なぜだろう？」と考えるきっかけすらつかめない現在の環境に埋没している子どもたちの生活である。畑田塾の寺子屋風スローな科学授業で、身の回りのいろいろな事物に対して「なぜだろう」と考えを巡らす契機になって欲しい。「ふしぎ」のいちばん大切なところは、自分で考えて、自分で答えを見つけることである。



## 平成17年度 会計報告

収入の部		支出の部	
繰越金	264,478 円 (前年度繰越金)	借料、損料	10,000 円 (机、椅子)
会費	671,000 円 (335.5 口)	講師謝礼	400,000 円 (7 名)
寄付金	4,500 円	アルバイト料	26,900 円
雑収入	6,000 円 (絵葉書、写真)	資料作成、印刷費	160,307 円 (資料、年報、出版)
合計	945,978 円	通信費	74,940 円 (郵送料、手数料)
		事務費	19,470 円 (事務用品)
		雑費	49,260 円 (講師接待、他)
		繰越金	205,101 円 (繰越、積立)
		合計	945,978 円

## 編集後記

昨年は庭の柿が豊作でした。年々木が高くなって実が採りにくいので、枝の刈り込みをしました。この冬は厳冬模様ですが、日々おだやかにすごしたいものです。

このたび関西二期会の畑田弘美様からアトラス社製のピアノを寄贈していただきました。幼い頃に弾いておられたものです。美しい音色が建物と響き合っています。皆様の変らぬご支援を感謝しています。(S.N.)

事務局 〒583-0874 大阪府羽曳野市郡戸1-1 畑田 勇 電話0729-55-4380  
会費の納入は郵便振替(口座番号 00980-2-41107 加入者名:畑田家住宅活用保存会)へお願いします。